

『
アムネジア
』

——あなたはそれを探してはならない

石堂藍

〈扉がきしみながら開く音がするの、ぎーってね。それから影が映る——開いた本の上に〉

人もまばらな喫茶店で、主人公の青年・島津伶の恋人・理絵が映画の説明をしている。語っているのは映画の最後のカット。私たち（読者）は、どんな内容か、ほとんどわからない映画のラストシーンのイメージから、ひっそりと作品世界へと入ってゆくことになる。

——窓の外に広がる林。上空に微かな飛行機の音。室内には机に突っ伏して泣きながら眠る主人公の男。開かれた本。扉が開いて影が射す。それは戻ってきた彼女ではない。つまり、主人公は彼女を失っており、彼を見ているのは第三者。そして彼は目を開く。……

喫茶店の外にはこぬか雨が降っているが、空は乳白色に明るい。映画の説明と相俟って、すべてが終わったあとの静けさが、あたりをおおう。小説は始まったばかりだというのに。

この静けさが、あるいは、次のような伶の内心の思いに象徴されるようなベシミスティックな情緒が、作品全体を覆っている。（すべては消えていく。いつか——やがて。（中略）すべては、どう始まって、どう終わったかにかかわらず、消えていくにちがいない。ふたたび蘇ることはないだろう）。この静かな存在／喪失の観照は、やがて荒々しく異様な事態によって破られ、伶の感覚は裏切られ、現実は一切断され、すべてが混沌に呑み込まれてゆく。それでもどこか静謐な気配を失わないのは、『アクアリウムの夜』とも共通する、本作の著しい特徴の一つだ。だが今は、作品の漠然たる雰囲気について、多言を費やすまい。

ここではむしろこのことを言っておきたい。『アムネジア』を一読して、そのわけのわからなさに、もう一度冒頭に戻った私たちは、そこに、この作品にこれまで現れてきた様々なイメージが置かれていることを知

る。そして、この作品が反復するイメージによって構築されていることに改めて気づく、と。すべてのイメージが二重写しとなって揺らめく。私たちの中で。あるいは語り手たる伶の中でか？

カレイドスコープが同じ形を二度と作ることがないのにも似て、少しずつ微妙にずれながら繰り返される同じ言葉、同じ情景。意味があるのかどうかも分からない奇妙な暗合、つながりそうでつながらないいくつもの断片——はまりそうではまらないジグソーパズルのピースがばらまかれたかのような……。この『アムネジア』という不思議な小説は、私たちに何を語ろうとしているのだろうか？

Ⅰ 危険な物語あるいは物語の危険

上も下もない真っ白な虚空を、本が墜ちていく。必死になって手を伸ばすが、つかめない。繰り返し、繰り返し、本は墜ち続ける。——

これは『アムネジア』の最後に出現するイメージだ。そして『アムネジア』を象徴するイメージでもある。このイメージに似たものを、ゲーム好きの人なら実際に見たことがあるだろう。——『MYST』、一九九三年にマッキントッシュ用として発売されたアメリカのゲームだ。高い人気を得て、世界的にヒットし、追隨作は〈MYST clone〉とまで呼ばれるようになった。続編も数作作られている。『MYST』では、特殊なリンクで本に書き込むと別の世界を創造することができ、本〈MYST〉を通してその世界に行けるということが大前提となっている。主人公（ゲーム・プレイヤー）は過去から墜ちてきた本を拾ったために、別世界に紛れ込んでしまい、わずかなヒントを手がかりに探索して回ることになる。『MYST』の世界は、既に滅ぼさ

れてしまった世界で、人が誰もおらず、森閑としている。音響も映像も寂しさにあふれており、独特のものがあるが、そのオープニングで、本は星をちりばめたような暗い虚空を墜ち続けていくのだ。

『アムネジア』は、『アクアリウム之夜』（一九九〇・書肆風の薔薇「現水声社」）の刊行後、間もなくから構想され始めたというから、この本が落下するイメージも、九三年の頃には、既に稲生平太郎の中にあつたはずだ。だから、この〈虚空を墜ちる本〉のイメージが『MYST』にヒントを得たものだとはいいたいのではない。日米で同時期に似たようなイメージが生まれたことに、多少のおもしろさを感じたのだ。『MYST』では、本は虚空を通して手渡されたに等しく、墜ち続けた本は、ついにプレーヤーに拾われ、別世界への通路となる。一方、『アムネジア』では、本には決して手が届かないまま終わる。もつともそれが『アムネジア』という本になつて読者のもとに届けられたのだと考えれば、その構造はいささか似ていると言えなくもない。しかし、果たしてどうだろうか？

この〈虚空を墜ちていく本〉の問題を考えるため、作品をたどり直してみたい。行きつ戻りつすることになるだろうが、まずは簡単に、冒頭から主人公の行動を追ってみよう。

主人公の青年・伶は大阪の零細編集プロダクションで働いている。簡単なパンフレットや自費出版などを請け負う地味な会社で、伶はその時、華僑系の商社の社史の編纂を手がけていた。クライアントから渡された資料のうち、初期の頃のデータの一部を使わないようにという指示を受けたが、そのデータの中には徳部弘之という名前があり、伶はある日、新聞で偶然にその名を見つける。徳部が路上で横死したこと、そして、徳部が戸籍上は死者であつたことを報じる記事だつた。

徳部に好奇心を抱いた侂は、恋人の理絵にその好奇心を洩らす。そして、理絵のついでイエローペーパーの記者・澤本申と面会することになる。侂は澤本から、徳部は謀殺されたのかも知れないという予想外の話を聞かされる。澤本は戦後史の闇の中にうごめく巨大な資金を利用した〈闇金融〉を追いかけているが、徳部はそのキイ・パーソンの一人だというのだ。ここで少し説明しておく、『アムネジア』の言う〈闇金融〉とは、一般に〈ヤミ金〉と呼ばれるヤクザ的な不当高利貸しのことではない。作品中でも説明されているが、表に出せない巨額の資金（例えばM資金など）があり、貸し金にして洗浄するシステムがあるという幻想のことである。この幻想を利用して詐欺を働くわけで、実際に金を貸すのではなく、巨額の資金を貸すに当たっては保証金がある等々のでまかせを言つて、金を騙し取る。澤本は詐欺グループを追っているのではなく、M資金が実在するという幻想そのものにはまっているのである。

侂は、澤本に引きずられるような形で、何人かの人々と会うことになる。徳部の若い妻、闇金融界で名前を知られている倉田重蔵、そして素人発明家の昆野とその仲間たち。倉田は、徳部は天才肌の発明家であり、自分は資金提供者だったと語る。昆野もまた、徳部は自分の先達とも言うべき人だったと、それを裏打ちするようなことを言う。しかし、昆野とその仲間は実のところ狂っており、昆野の発明は、未知のエネルギーを汲み取つて現実のものとする機械だと説明する。面会の途中で昆野たちの機嫌を損ねた澤本は、いきなりスパナで額を割られて大怪我を負つてしまう。侂たちは何とか無事に彼らのもとを去ることができたものの、その夜のうちに澤本は何者かに殺され、侂も爆発事故で重傷を負う。

一命を取り留めた侂は、倉田の事故死のニュースを聞いた後、病院を抜け出す。その時には既に理性の埒

外に踏み出してた伶は、理絵を殺しかけ、さらに徳部の家に行くが、そのまま行方知れずとなる。……
この展開をさらにおおぎつばにまとめると、一人の戸籍喪失者の死に好奇心を抱いて調べ始めた青年が、いくつかの奇怪な体験をした挙げ句、精神の平衡を失い、殺人（未遂）事件を起こして失踪する話、ということになる。

ここで、「奇怪な体験をした」ではなく「事件に巻き込まれた」という風にまとめられるのであれば、よほど予想のつきやすい物語と言えるだろう。事件に巻き込まれて自分もまた犯罪者になってしまう……特に奇妙なことでもない。サスペンスある事件と、その間の主人公の懊悩を描けば、ミステリ作品にも純文学作品にもできるだろう。トリックがあれば本格ミステリに、わかりやすいへアイデンティティの追求」などがあれば純文学に、事件に現代性があれば風俗小説に、そして〈闇金融〉をめぐるあれこれに焦点を当てれば歴史小説にも——それほど一般的な物語の型だと言える。『アムネジア』はしかしそのような作品ではない。

作品の冒頭から見ると、つごう三人の関係者が死に、二人が死にかけ、さらには銃撃事件まで起きているにもかかわらず、それらの事件を一本の糸でつなぐ根拠は薄弱だ。このようにあらずじをまとめてみればもつともらしいものの、そもそも、語られる出来事の間に関係があつたかどうかさえ疑わしいところがある。伶と事件の関わりも定かではない。本作はジャンル・ミステリでないのもちろんのこと、ほかのどんな物語の型に従った作品でもなく、〈連続する事件〉や〈変化していく主人公〉、〈歴史の闇〉等々の〈物語〉を追いかけていく小説ではないのだ。辛うじてプロットはあるが、ここには物語がない。この小説は物語ではないのである。

理絵に会っている場面を皮切りに、伶は次々と人に会う。動作としては、人と会って話を聞く、というよりも一方的に話を聞かされる、それだけのことしか伶はしていないように見える。断片的な〈話〉だけが点在するという印象は、伶が思い出す児童文学の内容の記述、雑誌掲載のインタビュー、カストリ雑誌の座談会、小説「記憶の書」などの挿入によつて、より一層強められる。小説に語られているすべての事象は、何となくつながりがあるように書いてばらばらで、まとまりがないのだ。だが、伶は、最後には恋人に手をかけるまゝになつてゐる。いったい何が起きているのか？

前段で〈物語はない〉と書いたが、実際には個々人の中には物語があるのだ。首尾一貫した妄想と言ひ換えても良い。澤本は、巨大な資金が動く〈闇金融〉という物語を脳内に紡いでいる。倉田もまた〈闇金融〉について別の物語を、昆野たちは、異次元との接触というオカルティックな物語を紡いでいる。物語を貫徹するためには、時には澤本のように、死も受け入れなければならぬ。自分の探案が〈危ないところ〉に触れ、死をも招くものだと信じているならば、死はある意味で当然の結果だということである。

伶は、初めは、例えば澤本の物語を、「薄弱な材料から根柢なく組み立てられた幻想を、きつと後生大事に抱え込んでゐるんだらう」と、醒めた目で見てゐる。しかし、なおも徳部への好奇心は消えず、徳部の家を訪ねて探偵の真似事をして以後は、〈謎を解こうとする自分〉という物語にはまり始め、それを危険だと思いつつも、なかなかそこから逃れることができない。人は人生を物語化する誘惑にいつもさらされてゐるが、非日常的な物語への誘惑はとりわけ強い。

〈闇金融〉の背景となる物語が非日常的なものであることは言うまでもないだろう（作中の言葉を用いれば

資金源は「マッカーサー時代の蓄積円」「ユダヤ資本」「対中共の謀略資金」。金額（「百億や一千億ゆう世界」「実際には五千億」）や登場人物（「国会議員のM先生」「大蔵（省）」「上と直でつながっている」）もすべて非日常的で、非現実的であればあるほどよい。その上に構築される物語も、あるとも言いえないような曖昧なものが、逆に真实性を保証する。なにしろ「公にはできない話」なのだから。ちなみに、Wikipediaの「M資金」の項目には、次のような興味深い記述があつた。（非日常的な用語を多用して、被害者の思考を麻痺させている点）に振り込め詐欺への影響が見られるというのだ。振り込め詐欺もまた、金額や登場人物こそ日常的だが、事故やトラブルなどの非日常的な物語を構築する物語的な詐欺なのだ。人々は一見もつともらしい、しかしそうそう起りそうもない物語に、とても動かされやすく、容易に物語の中にはまりこんでしまう。

このような、非日常的でもつともらしい物語の仲間として、オカルトが存在する。存在しないものを（隠されたもの）として（在る）と見る——闇金融とまったく同じ構造である。その物語の曖昧なところまでが似ている。そして、その幻想の中に生きる人々にとつては、それは（存在しない）のではなく、（隠されて在る）に過ぎない。オカルトの愛好家（？）として、稲生平太郎はオカルトの魅惑も危険もよく知っているだろう。自分たちの世界の真实性を守るために、いきなり凶暴化する昆野たちの態度はあまりにも恐ろしく、強い印象を残すが、オカルティックな物語が、人をどのようにしてしまいかをよく知っている著者ならではの迫真の表現と言える。

俗の（謎を解こうとする自分）という物語は、初めは謎めいた現実を探偵が合理的な物語として構築するという意味でもあつた。しかし、ひとりの謎めいた女の出現によって、そこに非合理的な、オカルトめいた要

素が混入し始める。女は倉田との会見になぜか同席しているが、仮面のように白く塗った顔、左手だけにはめた白い手袋とストッキング裸足といういでたちで、およそ、正気の世界に属しているようには見えない。そして伶についてこのように言う。「こんどのせいで失つて、まだ取り戻していかない。返してもらつてないの」。この女の登場は、現実世界を一気に引つ繰り返してしまふインパクトを持つ。まさに通り魔のように。伶は、この言葉に触発され、自分に、中心的な役柄を担う物語（しかしそれは忘れられてしまった）があると思ひ始める。「僕にとつて大きな意味を持つはずだという確信めいた思ひだけが、いくら打ち消そうとしても、膨らんでいく」。これもまた、無いものを隠されているものと思ふ幻想だ。支離滅裂なところに意味を――というよりは超越的なものを見る、オカルト的な思考だ。こうして伶は、現実の裏にある真実を探求する者にもなつて、密やかに別の物語の構築にもはまつていく。

戸籍喪失者の死に興味を引かれたことによつて伶は、闇金融とオカルトという二つの幻想へといざなわれる。そこからさらに、謎を解く自分という物語、〈忘れられた物語〉の主人公である自分という物語へと導かれる。同時に、〈自分は物語の中の住人ではない〉という現実的な意識も持ち続ける。物語たちと現実の間で揺れ続ける伶。〈圭〉という形に似た謎めいた記号が記された一枚の紙を、初めは「王」の字に似ているが何かの嫌がらせだと思ひ、それから澤本の名前「申」を読み取り、次には、謎の発電器を記号化した形と見たように。現実を物語化するという幻想の果てに待ち受ける非日常の最たるものは、当たり前前の現実から見れば、それぞれ死（探偵）と狂気（オカルト）。

爆発事故によつて、死を経験した後に蘇生した伶は、探偵の道に戻るべくもなく、「本当の物語」の主人公

の地位を取り戻す道——つまりはオカルト的な狂気を選ぶ。どのみち、物語から抜け出せない限り、悲劇は免れない。

これはそのような物語の危険性を描いたメタフィクションなのだ。

だが——本当にそうなのだろうか？

II 裂け目

右の説に従えば、虚空を墜ち続ける手の届かない本とは、俗を主人公とした物語のことになるだろう。あるいは物語化された人生の象徴。それはつかみとることができない。人生の物語化は蟹気楼のようなもので、実体がない。『アムネジア』が定型的な物語になっていないのも、そのような物語化を拒否しているがゆえだと言えるだろう。

そもそも、自分を中心とした物語を構築することは、どんな物語であれ、問題を孕んでいる。事後的に物語化するのであれば、まだしも害は小さいが、物語を生きているような錯覚は、時として悲劇を生む。〈自己探し幻想〉などその典型例の一つだが、現代の日本では、この病に多くの人が冒され、生きることそのものの喜びを見失っている。人は生まれてしまったから生きる、それだけの存在だが、それでも生きていくのに不足はない。

とはいえ、こうしたテーマを語るのに、なにも『アムネジア』のような複雑怪奇な作品にしなくてもよいのではないか？ もっともな疑問である。そこで、視点を変え、『アムネジア』が通常の物語となること妨げ

ている、もう一つの要素である〈裂け目〉について見ていこう。

〈裂け目〉とは、非日常的・非合理的要素の侵入あるいは、伶自身の意識の変容が現れているところを、今、便宜的に指している。侵入と変容の両面は、『アムネジア』の視点人物が伶であるからには、分ちがちがたく結びついている。このことを非常に地上的に解釈すると、伶の意識の変容とはすなわち狂気であり、非日常的・非合理的要素は狂気が生み出した妄想でしかない、ということになるだろう。そもそも、この作品が、伶もしくは伶の代理人によって書かれたことがエピソードで附記されているからには、どんな合理的な解釈を与えることもできる。〈信用できない語り手〉は、どこかでごまかしをしていると考えることができるのだから。しかしこうした理屈付けの作業は虚しいので、すべて割愛させていただく。

まず、最も目立つのが、既に述べた、白塗りの女である。いでたち、唐突なせりふなど、彼女自身が現実を切断して非日常化する存在だ。しかもこの前後で、倉田自身の態度もおかしい。倉田は伶に「目通さしてもらいましたで」と言い、自分のことについてももう少ししっかり書いてくれてもよいのではないかと話しかける。誰やらと誤解している風情である。女が「なくしたのよ、このひと」と、先に引用したせりふを言うとき、「そんな阿呆な話ないやろうが。こつちもそこまで惚けとらんよ」と応じ、女をいなす風である。まもなく、倉田が闇金融や徳部のことを話し出し、読者が期待するような、闇金融関係の人物像になると、女は立ち去って、〈裂け目〉は閉じられてしまう。しかし伶はその時、〈重要な隠された意味が秘められているかもしれないという苛立ちにも似た気分を襲われ〉る。

女の言葉に囚われた伶は、以後、すべてが〈奇妙な色合いに染まりはじめた〉ように感じる。そして、女

の言葉が〈大きな意味をもつはずだという確信めいた思い〉をふくらませていく。そして、〈それならば、思い出さなくてはいけない〉と宣言するまでになる。

もう一つの大きな〈裂け目〉は、言うまでもなく、昆野たちとの邂逅である。未知のエネルギーを取り込んであたかも永久機関のように作動する発電器を発明したと信じている彼らは、異次元の超越者めいた存在、あるいは異次元そのものとの接触をそれとなく示唆する。異次元とつながることができる昆野は、彼自身が未知のエネルギーの媒介者となるらしい。昆野の仲間たちは、昆野がわずかなガソリンで四百キロを走破すると得意げに語る。「そういうときはね、ぼうつとなつて、いつのまにか着いているんだよ、なあ、真ちゃん。眠つてはいないんだけど、まるで、深い海の中を走っているような感じで……」。

この部分では、予測の付かない行動を取る、狂った人々と一緒にいることの恐怖が描かれているだけで、超自然的な恐怖が描かれているわけではないにもかかわらず、それと同質の得体の知れない恐怖感がある。昆野たちから解放され、車中の人となつた伶が、「明かされる？ 全部出る？ 山の上の光？」と反芻すると、それらの言葉がもたらすのは超自然的な恐怖感だ。伶の中で、それが人間の狂気とは別の何かと結びついたからだ。そして伶の反芻を読む私たちも、そこから超自然的恐怖を感じ取る。

まもなく、車を運転する伶は昆野が長距離を走る時と同じような状態になり、露店が立ち並んで祭りでもしているのかと思われるところを走り抜けていく。ここもまた恐ろしいところだ。ここでは、伶自身が〈裂け目〉となつていて、そこから読者は現実の別の相を垣間見るからである。『アムネジア』は、恐怖を主眼とするホラー小説ではない私は考えているが、それでもこの部分を読むと、ホラー小説と言いたい気持ちに駆

られる。

後に理絵が語ったところでは、この時、実際に運転していたのは理絵で、伶は眠っていたのだという。つまり、幽界のようにほのぐらいところを通り抜けながら、物語と現実との境界が崩落していく感覚を味わったのは、夢の中だったのだ。しかし、伶にとっては、それが紛うことない現実であったのだし、読んでいる私たちにとってもそれは同じことで、その恐怖感は一リアルなものだ。

これ以後はもう、〈裂け目〉の連続である。家に帰り着いた伶は、一眠りした後、いやな夢から目覚めると、あの謎の女から電話がかかってくる。浴槽には、病院に送り届けたはずの澤本の死体。そして残されていたメッセージ（圭）。爆薬の爆発。読んだ瞬間にはすべて伶の夢ではないかと私には思われたが、次の章で、澤本の死体も爆発も現実だったと知らされる。そしてやはり理絵の証言になるが、このうちのメッセージが記された紙は存在せず、ルージュが塗りたくられた手帳であったという。この経過のほとんど唯一の合理的解釈と見えるものは、すべてが伶の自作自演だが、伶の意識からそのことは抜け落ちていく、というものだ。私にはほかの現実的な解釈は思いつけない。しかし、この一見合理的な解釈にしても、伶の信じがたい狂気（二重人格的分裂）を前提とした〈裂け目〉以外のなものでもない。

入院中の伶は、倉田重蔵ならぬ倉田卓造の事故死の報に接し、再び、いくつもの死に論理的な整合性を見出そうと努めるが、考えはまとまらない。その時、伶は、理絵が「本当の物語を返してもらわなくてはいい」と言うのを耳にする。それは伶自身が夢うつつで語った言葉だったが、その言葉を契機に、伶の中で完全な変容が起きる。頭の奥で、花びらのようなものが開いていく。「それはゆつくりと力強く開いていって、

頭を内側から逆に包みこみはじめた」。そうして至福感に包まれた伶の前に、すべてが明らかな新しい現実が開き始める……。

満州時代の徳部を描いたと思しい小説「記憶の書」を読んだ伶は、病院を抜け出し、「手帳」を取り戻すべく、理絵のもとを訪れ、理絵を殺してしまう（実際には未遂）。しかし、伶は理絵と次の生でまた会えるだろう、と考えている。理絵は「アーモンドのような形をした目」だと描写されるが、それは伶が思い出した児童文学に登場するペロニカと同じ特徴だ。徳部の妻は児童文学に登場するもう一人の女だが、同時にペロニカでもあり、謎の女でもある。理絵は「また会えるかな」と言い、謎の女は「また会えてよかった」と言う。「複雑な入れ子になっている」のだとも。こうして、伶の中では、一つの図柄が完成する。伶に関わった謎の女たちは、みんな理絵なのだ。

伶はまた「記憶の書」に描かれる徳本⇨徳部をもなぞっている。「手帳」を取り戻そうとするのは、徳本の行動だ。「手帳」を取り戻し、「本」を手に入れなければいけない。……そこに「秘密」が——あるいは〈本当の物語〉があるのだから。「記憶の書」で、徳本に〈共感〉した語り手の医者には、「奈落を一冊の本が繰り返し墜ちていく」様を幻視している。「手を伸ばしてつかもうとするけれども、届かない」。医者の中の本は「闇夜の空、その天頂に向かって墜ちていく」が、これを灼熱の白い空間に変えれば、そのまま冒頭に上げた伶の幻視となる。ここでも「本」が何なのか、具体的には語られていない。ただ墜ちてきた飛行機との関連がほのめかされている。つまり、「本」とは人をオカルト妄想に導く〈神秘的な何か〉だ。

伶は「手帳」を取り戻すために、再度、徳部の家を訪れる。徳部の妻がそれを手にしていたからだ。徳部

の家を初めて訪れたとき、仕事の疲れから睡魔に襲われた伶は、おそらくは無意識に発した自分の質問の声にはっと目覚める。目の前にはそれまでなかったお茶が用意されており、時間が経っていることを示す。今や伶はこう考えている。その失われた時間に、徳部の家の二階で〈発電器〉を見せられ、そのため〈現実が異なつた相を開示し始めた〉のだと。確かにこのシーンでは予想外の時間が経っていたことが語られているけれど、そう考える根拠は何もない。

〈裂け目〉を追つて『アムネジア』を読んでいけば、あたかも、周囲のできごとに影響されて、一青年が妄想を育て上げていく過程を追つた物語のようだ。だが、しかし、これは逆なのだ。私が、そのように読んでゐるのである。話が散らばっているだけで、それをつなぐ線が薄弱なのは変わりがない。ただ、こうした〈裂け目〉を中心に読んでいけば（ここに挙げた主なもの以外にも細かい点がたくさんある）、私たちはそのような物語を拾うことができるのである。

さらに視点を換え、これはオカルティックな幻想小説だと割り切つて読むこともできる。白塗りの女は、また倉田も、伶にもう一つの現実への覚醒を促す、次元を超越した存在だということが出来る。理絵もまた無意識のうちにその役を担つて、伶にヒントを与える。伶は医者の子生まれ変わりで、伶がかつて書き、倉田が〈目を通した〉のは「記憶の書」だ。「記憶の書」に倉田と女とも推測される男女が、ちらりと姿を見せる。〈本〉はここでは〈啓示〉あるいは〈神秘そのもの〉となる。

III 満ちあふれる謎

右の一連の読みから、ここでさらにもう一つ、別の仮説が浮かび上がってくる。

『アムネジア』は、このように、さまざまな読み方を読者から引き出させる装置ではないか？ という仮説だ。読者はそれぞれの物語を読み取る。その読み取る範囲を最大限にするため、限度ぎりぎりまで曖昧な物語にする。そのような、実験的な装置なのだ。しかし装置であると思わせたなら失敗なので、著者は（ドライブ感を失わないように努めた）（『ダ・ヴィンチ』のインタビューによる）のだろう。

いやはや、とんでもない小説である。こうした小説を一般には、「深読みを誘発する」などと言うのだが、その程度が半端ではない。中には、こんな書評もあつた。『アムネジア』の紡ぐ妄想と、妄想と現実の間で揺れ動く主人公を的確に捉えつつも、「稲生は後半で、彼らの背後に宇宙からの意志の働いていることを暗示する」と論を展開するものだ（巽昌幸『論理の蜘蛛の巣の中で』二〇〇六・講談社）。そしてこう評する。「その構図はきわめて脆弱なものだ。死んだ老人のうらぶれた住まい、喫茶店で放言するブローカー、「電器屋の二階」の異常者たちといった、生々しい場所と肉体の記憶が、そうした構図によって支配され、落ち着きどころを見出すとは到底いえない。低俗な言葉が、無数の枝分かれを示しながら、濁った水のように流れ、あちこちにわだかまる妄想たちを結んでゆく、それこそが世界の真相であつて、宇宙からの意志なるものは、その流れが一瞬見せる水面のゆらめきにすぎないのではないだろうか」

巽は、平たく言えば（宇宙人の介入）が語られていると読み取って、興ざめたのだろう。あの、入院に

到るまでのリアリティはどこへ行つてしまつたのか、という思いだつたのではないだろうか。

しかし……〈宇宙からの意志〉？ そんなもの、どこにあつたろうか？ 推測するに、著者が腐心したという謎めいた記号〈丰〉に目を眩まされたのではないだろうか。オカルト好きな人からは、〈王〉の字に似ているという記述から、これが〈ウンモ星人〉のマークではないか？ という謎解きが表示されているのだが、その説に従つたのではないかと思われる。『アムネジア』に描かれる〈世界の真相〉をもしつかりと見据えながら、〈宇宙からの意志〉を読み取つてしまうあたりは、私には何とも不可解だ。まるで、見えない条理を探し求める俗のように、異も見えない糸をつかんでしまつたかのようだ。そもそも、私が〈丰〉で代用してきたこの記号は、私には、百歩譲つても〈王〉には見えない。この記号について著者は、〈そんなに難しいものではない、ある意味で見たままだ〉と述べている（著者からの直接の伝聞）ので、それほど難しく考える必要はない。〈本〉。それ以外、何に見えるというのか。——別のものに見える、というのであれば、それはそれで一向にかまわないが。

〈宇宙からの意志〉はまさに、稲生が見せたいと思つた〈その流れが一瞬見せる水面のゆらめき〉にほかならない。脆弱なものにも、〈宇宙からの意志〉は昆野たちの妄想の一部を成している可能性はあるが、もつぱら読者が諸々の細部から読み取る幻想Ⅱ物語に過ぎない。しかし、そう読むのが間違いだとも言い切れない。もしも、この説に従つて読み切るならば、〈本〉はちょうど『MYST』の本に似たものになるだろう。我々より優れた存在から手渡される、異次元への招待状である。

それにしても私たちはいつたい、何を讀んでいるのだろうか？ 『アムネジア』はエピソードで、これが俗、

もしくは俗の代理人によって書かれた手記であることを示す。もしかしたら小説なのかもしれない。これまでの体験や読んだものから俗が組み立てた、あり得べき物語。しかし俗が壊れているので、物語も壊れている。あるいは混乱した、眠りの中で見る夢のような話。夢みている間は真実であつても、目覚めてしまえば消え去つてしまう、はかない記憶。あるいは〈信頼できない語り手〉が語る、隠蔽だらけの語り。そこからはいくらでも謎を読み取ることができると。その中には、解けない謎もいくつもある。

例えば、時間の流れ。最も客観的であるエピソードは、俗の失踪時日を一九八二年四月十七日としている。入院中の俗の時間感覚は明らかにおかしく、事故から二週間しか経っていないことになっているが、実は一月半が経過していると宇多川は言う。とすれば、爆発事件は三月の初め頃だ。しかし、俗の体験は初夏の出来事として語られているのだ。徳部の家を訪ねたときには、季節は晩春から初夏と推測される。カブトエビが水の張られた田んぼに居るのだから。その後、昆野のところへ出向く時も、理絵の服装から、夏の前後が予想される。定期試験という語から、夏休み前とも取れる。そして昆野のところから帰った直後に、爆発事件が起きて俗は入院する。

また、徳部の家へ上がり込んだ俗は、まだ納骨がんでいないはずだ、と断定する。すぐに納骨してしまう場合もあるのだから、断定する根拠はないのだが、まだ初七日のうちであればその考えは不思議ではない。保険金が未払いなのも納得がいく。その発言が自然な期間はせいぜい延長できても四十九日だろう。とすると、理絵との会話の最中に、「三月初め、それとも二月の終わり？」の「時季外れの大雨」と共に回想されている徳部の死についての記事との整合性はどうなるのだろうか？ ちなみに、俗の語りの中では、春夏秋冬や梅

雨など、時季を示す言葉はいっさい使われておらず、月への言及があるのも、このただ一度きりだ。

この時間のずれはなんだろうか。一つの解釈を試みるなら、「時季外れの大雨」も含めてすべては、冬の間
に進行して、三月の初めか二月の終わりの爆発事件に到ったのだが、伶は、それを初夏の物語として書き変
えた、ということである。話中話の児童文学が初夏の物語であるのに合わせたかのように。あるいは作中作
「記憶の書」との季節的な近似を避けるために。雑誌の記事の部分を除けば、すべては伶の視点から語られた
ものであり、その記述になんら信を置くことはできないが、少なくとも、〈伶〉にとって主観的な真実を語つ
ているのだと考えるなら、冒頭の記憶の揺らぎを除いて、伶にとってすべては夏の物語に見えていたのだと
も言えるかもしれない。

また、別の解釈をするなら、伶にとつては、六週間が二週間だったように、すべては一年以上の時間をか
けてゆるゆると進行したのだが、語りはそれを隠蔽しているということもできる。さまざま要素を考え合
わせれば、いささか無理な仮説ではあるけれども。

また、「三月初め、それとも二月の終わり？」については、別の解釈もある。「時季外れの大雨」と共に回
想されているのは徳部の死亡記事ではないということだ。徳部とは別のひとりの老人が横死して、戸籍喪失
者だとわかったという記事だったのかもしれない。なにしろ冒頭では徳部の名は出てこず、「男」「ひとりの
老人」としかなっていない。戸籍に関する記事に目を留めるめぐりあわせにあるのかも、という奇妙な感想
がそのことをわずかに裏打ちする。そしてその老人の戸籍は、神戸を出生地とするものらしいが、徳部は東
北の出身であるらしい。年齢も少し違う。この部分は伶の記憶が——語りが曖昧になっているということ

しよつぱなから暗示するギミックなのかもしれない。しかしわからない。断定する手がかりは何もないからだ。そして、いずれにせよ、こうしたことは断定する必要がない。むしろ積極的に、断定してしまうことは避けなければいけない。なぜなら、『アムネジア』はそのような固定化を周到に避けた作品だからである。著者の意図を尊重するというのではない。固定化を避け得て、しかも形を保っている稀有な作品だからこそ、それを断定によつて損なうのは、もつたいないからだ。「水面のゆらめき」でしかない「宇宙からの意志」を、氷らせて固めても、ゆらめきもつていた玄妙な味わいはどこかへ行ってしまうのだから。

それならば、私がこれまで書いてきたことは何か？

それは、可能性である。『アムネジア』という作品の奥行きに蔵しまわれている、さまざまな可能性にほかならない。

IV 記憶の書

そろそろ『アムネジア』と戯れるのも終わりにする頃合いだ。結論めいたことを言う前に、ここまではほとんど触れてこなかった作中作「記憶の書」について語ろう。

「記憶の書」は、何かの罪を犯して満州の大連に流れてきた精神科医が語り手となっている。憲兵中尉・鯖江の要請によつて汽車で奉天まで出向いた彼は、スパイ容疑で囚われている徳本政之の診察をすることになっていた。徳本は記憶を失つていて、単なるアムネジア（健忘）だと診断されているが、中尉は伴狂ではないかと疑つており、さらなる鑑定を医師に求めたのである。調書に拠れば、徳本は何か目も眩むような閃光を

見て、その後、何らかの体験をし、昏倒した。その体験は手帳に書き留めてあるはずだが、その手帳をなくしてしまった。そこで手帳を取り戻すために病院を脱走した……。医師は徳本と話すうちに（共感）し、ありえざる記憶を蘇らせる。そして気付けば列車の中の人となっていた。前の席には徳本が坐っている……。

これまでに指摘した人がいるのかわからないが、「記憶の書」は『海辺のカフカ』に似たところがある。『海辺のカフカ』は少年の物語だが、もうひとりの主人公としてナカタさんという猫と話が出る浮浪者が登場する。戦時中の疎開先の山で、児童たちの集団が謎めいた怪光に遭遇するという事件が起きる。その児童のひとりであったナカタさんは心神を喪失し、目覚めた後も記憶を失い、人間社会の埒外に生きる者となつてしまった……。憲兵による調書などが差し挟まれたその形式までが、「記憶の書」を思わせる。読み比べると、すぐにわかるのだが、こうした超越的なものの気配の描出においては、稻生平太郎と村上春樹とは大人と子供だ。春樹の表現では話にならない。調書なども、「記憶の書」を読んだ後では、笑ってしまうほどお粗末だ。しみじみ、人には埒というものがあるのだと思う。

『海辺のカフカ』は二〇〇二年の刊行で、二〇〇六年刊の『アムネジア』よりも早いと思われるかも知れないが、実は違う。「記憶の書」は、『アムネジア』の中でも最も早く成稿した部分であり、一九九〇年代半ばには同人誌『ピラミッドの友』に掲載されている。私が初めて読んだのは、一九九六、七年頃で、『幻想文学』に掲載する計画もあった。しかし、あくまでも長編の一部として構想された作品を、短編として形を整えて発表することにはいささかの危惧を覚えた私は、掲載を見送ってしまった。『カフカ』の刊行後、発表しておけばよかったと悔やんだが、後の祭りである。

以上は、誤解を生まないために書き留めておくための余談に過ぎない。ともかくも、私はこの「記憶の書」をとりあえず読んだ。一読、神秘体験を言語化して追体験させるものだと思った。神秘体験とは、瞬間的な悟り、超越的なものとの合一感、持続的な至福感といったものを伴う、人間に特有の体験である。

神秘体験は珍しいものではない、と稲生平太郎は言う。実際、宗教感情やオカルティックな体質（？）などとはまったく無縁に、唐突に誰をも襲う可能性のある感覚であり、人間にごく普通に具わっている性質（体質？）ではないかと私も思う。稲生はUFO本『何かを空を飛んでいる』で、人間とは「空に光り物を見ってしまう」存在であると述べているが、これも似たようなことを言っていると同じと見て良いだろう。

神秘体験についての報告例は多いが、おおむね紋切り型を踏襲する。その紋切り型は、体験者には何を言っているのかわかるが、体験したことのない者にはその実質がほとんど伝わらない。もともと、神秘体験そのものは言語化できるようなものではないのだ。一方、この体験を芸術化しようとすることも多く、文学にもそれは見ることができ。しかし元来、言語化はできないのだから、格別の工夫が必要になる。神秘体験が、多く詩の形で語られるのはそのためである。

詳しくは「神秘文学への誘い」<http://isidora.sakura.ne.jp/mizu/water3-1.html>を見てもらいたい。〈その1〉の「神秘体験の祖型」にその伝統的な表現が、そして〈その4〉の「現実の中に神秘が顕現する」に、「神秘体験を言語化して追体験させる」ものだと私が感じた小説を挙げてある。「記憶の書」は、こうした数少ない系列に連なる小説の一つだと感じたのである。

「記憶の書」は端的に言えば、感じる小説である。物語を追うとか、登場人物に感情移入するとかいったこ

とはなく、読むことによつて何かを感じる小説なのだ。その効果は、ある種の音楽に近い。文学では、詩はしばしばこの境地を目指して書かれる。小説なので、全篇がそうなっているわけではない。一連の描写によつて、ある部分で名づけがたい高揚感が得られる。その部分が物語的な山場でもあるかどうかは作品による。さすがにそうたやすくは神秘体験そのものが得られたりはしないのだが、それでもある種の似た何かを味わうことが出来る。

「記憶の書」はしかし、前後を断ち切られたようになっていて、全体の一部だという説明だった。「闇金融の話なんだよね」とは、その当時からよく聞いていたのだが、それではわけがわかるはずもない。私は、「記憶の書」の前後に、これに直接つながる物語がつくのだろう、と思い、そのことを疑つていなかった。

どんなものかはわからないが、この話に絡んで、戦後のM資金幻想につながるような秘密の資金が満州で作られる、とか？ と、まあ普通はその程度のことしか考えつかないだろう（たぶん）。もちろん予想とはまったく違うものが出現したわけで、啞然とせざるを得なかったわけだが、その驚愕は、「記憶の書」を前もって読んでいただけに、一般の読者よりも大きかったことは間違いない。

「記憶の書」が解体されて『アムネジア』の中にばらまかれていたからだ。しかも、本書のタイトルは、最終的には『アムネジア』に決定されたが、それまではずっと「記憶の書」と呼ばれていたのである。「記憶の書」を抱えた「記憶の書」は「記憶の書」の細部で構成されている。まさに「複雑な入れ子構造になっている」のである。

その照応の具合を詳述するつもりはない。読者は各自、たやすくそれを行うことが出来るだろうから。そ

してまた『アムネジア』が「記憶の書」と照応する部分しか持たないなどと、でたらめなことを言うつもりもない。この小説がいかにかさまざまな暗合によって成立しているかは、冒頭にも述べたとおりであつて、それは到底「記憶の書」だけでまかなえるものではない。

ただ、「記憶の書」が『アムネジア』の中で反復されることによつて、その神秘体験に似た何かが拡大され、より複雑に、大規模な形で展開されることになつた。

『アムネジア』は、高揚させるといふより、人を混乱させ、惑わし、見知らぬ場所へと運んでいく。すべてが整合的に解釈されてしまい、謎が残らないのでは、そのようにはならない。あるいはテーマが一つに決まつてしまつてそれ以上発展性がない感じでも、そうはならない。いくつもの解釈の可能性、読みの可能性がなければならぬ。理に落ちきつてしまつては、台無しなのだ。だから、読む方も、整合性に就く必要はない。ただ読んで感じればよいのであつて、それ以上のことは必要ない。『アムネジア』を読むということは、一つの体験にほかならないのである。この時、手の届かぬ〈本〉とは、言語化し得ぬ神秘体験の実質となるだろう。もともと、文学を読むとはそういうことだ。私たちは文学を読むことによつて、知識を手に入れたり、人生訓を与えられたりする必要はない。文学を読むとは別の時間を確かに生きること、夢を見ること。私たちは生にいたずらな意味づけをしてはならないのと同様に、文学にいたずらな意味づけをすべきではない。『アムネジア』もまた、夢を見るように読めばよくて、そうすれば私たちはどこか、自分の意識ではたどりつけないところへと運ばれるだろう。そのような、本当の夢のような小説は、いつも稀少で、なにものにも替えがたいのである。